

出題分野：第4節 日本史探究（学習指導要領P191～）

C 近世の日本と世界（P229～） 【小項目（イ）】（P238～）

第1問 高校生の真理さん・裕子さん・一朗さんは、18世紀後半以降、江戸幕府や諸藩において改革が必要となったのはなぜだろうかと考え、次のような仮説をまとめた。この仮説を読んで下の問いに答えよ。

仮説 「内憂外患」の言葉に象徴されるように、a 日本近海への外国船の接近への対応や、b 各地で頻発した一揆などへの対応といった、幕藩体制を揺るがす国内外の危機的状況に対応しなければならなくなったため。

問1 真理さんは、下線部 a の日本近海へ外国船が接近するようになった目的について、16世紀における外国船の接近と比較しながら検討することにし、以下はのようなまとめを作成した。歴史的出来事A～Dと、その目的を説明する文、日本に接近をはかった国との組み合わせとして正しいものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

	16世紀	18世紀後半～19世紀前半
国名	ポルトガル、スペイン	イギリス、ロシア、アメリカ、オランダ
歴史的出来事	大航海時代 宗教改革	ロシアの南下政策 …… A アメリカ独立革命と西海岸への進出 …… B ナポレオン1世によるオランダ征服 …… C 産業革命 …… D
目的	イスラーム世界への対抗 キリスト教の布教 アジア貿易の拡大	<div style="border: 1px dashed black; width: 150px; height: 50px; margin: 0 auto;"></div>

目的を説明する文

- ア. 日本を、中国との貿易船や捕鯨船の寄港地にしようと考えた。
- イ. 市場を求めて世界的規模での植民地争奪戦が展開される中、アジアへも進出をはじめた。
- ウ. シベリアを経営するため、日本を食料などの供給地としようと考えた。
- エ. アジア貿易における勢力が衰えていく中、日本での優位な立場を保とうと考えた。

日本に接近をはかった国

- I. イギリス II. ロシア III. アメリカ IV. オランダ

- ① A - イ - II
- ② B - ア - III
- ③ C - エ - I
- ④ D - ウ - IV

解答 (2)

問5 18世紀半ば以降、川柳や狂歌などの文芸が庶民のあいだにまで広がったことに関心をもった真理さんたちは、その理由について、いくつかの資料を参考にしながら考えてみることにした。

資料1 「寺子屋開業数の推移」(『日本教育資料』より抜粋)

年 代	開業数	年 代	開業数
享保 (1716 - 1735)	1 7	文政 (1818 - 1829)	6 7 6
天明 (1781 - 1788)	1 0 1	天保 (1830 - 1843)	1 9 8 4
寛政 (1789 - 1800)	1 6 5	弘化 ~ 嘉永 (1844 - 1853)	2 3 9 8
文化 (1804 - 1817)	3 8 7	安政 ~ 慶応 (1854 - 1867)	4 2 9 3

資料2 「寺子屋で使用されていたおもな教科書」(高橋敏『江戸の教育力』ちくま書房より参照)

『いろは』 いろは	『百姓往来』 農業に関する教え
『村尽 (むらづくし)』 周辺村名	『商売往来』 商取引、金銀銭の両替、正直など
『国尽 (くにづくし)』 日本国六六か国名	『借用証文』 金銭の貸借証文
『年中行事』 一年の暦のうつりかわり	『田地売券』 田地の売買証文
『源平』 人の名前	『番匠往来』 番匠 (大工) に関する技術、作法
『東海道往来』 東海道の名所史跡案内	『女今川』 女子専用の道徳書

資料3 「江戸の貸本屋 (詳説日本史B改訂版 山川出版社P 2 2 9画像)」



[班学習での会話]

真理：庶民の教育機関であった寺子屋が、江戸時代中期から幕末にかけて全国に広く普及していているのが資料1からわかるわ。

一朗：江戸や大坂などの町々はもとより、地方の小都市や農山漁村にまで多数つくられていったという話を先生からきいたことがあるよ。

裕子：それはすごいわね。寺子屋ではどんなことを教えていたのかしら。

一朗：一般的には「読み・書き・そろばん」の3つが知られているけど、「手習（てならい）」が学習の大部分を占めていて、そこに「読物（よみもの）」や「算用（そろばん）」が加わっていったようだよ。

真理：資料2を見ると、いろいろな教科書が使われていたのがわかるわね。

裕子：「国尽（くにづくし）」や「東海道往来」などの地理関係の往来物や、「百姓往来」・「商売往来」・「番匠往来」などのような産業関係の往来物がたくさん見うけられるのが興味深いわ。

一朗：それは、江戸時代には、からだと
思うよ。

真理：資料3の貸本屋の存在も見逃せないわね。

裕子：文政期には、江戸だけでも実に656軒の民間の貸本屋があったと聞いたことがあるわ。それぞれの貸本屋に仮に100人ずつ顧客がいたとすると、6万5600人の常連客が存在したことになるわ。これに大坂や京都などの貸本屋まで加えたらものすごい数になってしまうわね。

一朗：書籍や版画の新たな購買層を拡大させる上で、貸本屋が大きな役割を果たしていたことがよく分かるね。

(1) 会話中の空欄に入る説明として適当でないものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

- ① 経済生活や交通が発達したことで庶民の生活圏が拡大されて、地理上の知識が要求された
 - ② 農村にも貨幣経済が浸透したことで、農書を読む能力など読み書きをする力が求められるようになった
 - ③ 村役人の不正を追及して、民主的で公正な村の運営を求める小百姓らの運動がおこるようになった
 - ④ 出稼ぎで都市部に出ていく人が増えたことで、職業生活に備えた技術や作法を身につける必要があった
- 解答は「③」

(2) 以下は、今回の学習を通して真理さんたち3人が導き出した仮説である。これを読んで空欄Ⅰ、Ⅱに入ると予想される文章の組み合わせとして最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

庶民の教育機関として各地に寺子屋がつくられたことで、(Ⅰ) こと、また、(Ⅱ) ことで、文芸が広く民衆のあいだに広まったのではないだろうか。

- | | |
|---------------------|----------------------|
| Ⅰ：ア．文字を読み書きできる人が増えた | イ．世の中の動きを知る人が増えた |
| Ⅱ：ウ．貸本屋が幕府からの統制を受けた | エ．安価で本を借りられる貸本屋が普及した |

- | | |
|-----------|-----------|
| ① Ⅰ－ア Ⅱ－ウ | ② Ⅰ－ア Ⅱ－エ |
| ③ Ⅰ－イ Ⅱ－ウ | ④ Ⅰ－イ Ⅱ－エ |

解答は「②」

